

“社会全体が支える豊かな森林づくり”を進めよう!



© 静岡県

■表紙写真 題名：森の中でアスレチック遊びを楽しむ子供等 撮影場所：浜北森林公園 撮影者：鷹野 節二氏（磐田市）

本誌はホームページでも掲載しております。是非ご覧ください。URL：<http://www.moritohito.jp>

## INDEX

- |   |  |
|---|--|
| <p><b>2</b> 首長は語る(No.20)<br/>市民力を生かしたまちづくり</p> <p><b>3</b> 支部だより①<br/>禍転じて福となす</p> <p><b>4</b> 支部だより②<br/>作業道「諏訪ノ台線」の開設</p> <p><b>5</b> 県庁だより①<br/>森林整備事業関連この1年</p> | <p><b>6</b> 県庁だより②<br/>『間伐に寄与する紙』を使って森を守り育て活かす</p> <p><b>7</b> 森林・林業研究センターだより(No.68)<br/>タマチョレイタケの簡易な菌床栽培技術</p> <p><b>8</b> 本部情報<br/>▶しずおか森の仕事体験会<br/>▶山村及び林業の振興研修会</p> <p><b>8</b> 事務局だより</p> |
|---|--|



この用紙は、間伐材を原料としております。



市民力を生かしたまちづくり

御前崎市長 石原 茂雄



水平線が丸く見えるまち・御前崎

三方が海に囲まれた御前崎市は、海から朝日が昇り、地球の丸みを感じる水平線へ夕日が沈んでゆく景色を望むことができます。漁港からは新鮮な海の幸が揚がり、浜岡砂丘や山もあり、そして、国際貿易港として知られる御前崎港もあり、平成16年の御前崎と浜岡の合併はうまくマッチして、「自然に恵まれたまちづくり」ができると考えています。

2007年10月の『月刊現代』の「住みやすい街ランキング」では、御前崎が自然やささまざまな角度から全国で第3位に選ばれましたが、この自然をいかに生かしていくかが今後の課題です。

市民も、御前崎の海、浜岡の砂丘はわれわれの宝物だという気持ちを持ち続けています。砂丘に台風で流木が漂着した際には、市民ボランティアが除去と清掃に汗を流してくれました。



▲「カメバックホーム」での海岸清掃

また、アカウミガメが安心して卵を産めるようにと、中学生が「カメバックホーム大作戦」と題した海岸清掃をしたり、ふ化が遅れた子ガメを小学生が飼育し、翌年海にかえしてやったりとウミガメの保護活動をしています。

子供たちが、人の命と同じように小さな命を大切に、海とのかかわりを持っているということに感銘を受けます。

歴史に沿った特産品開発

増え続ける荒廃農地も、市民が牛を放牧して雑草を食べさせ、建設業界の方が重機で土地を掘り起こしてくれました。そこに菜の花を植え、菜の花から採れた油を小学校の給食に使いました。また荒廃農地を再生しサツマイモを植え、その芋から「海と風」という焼酎や芋コロッケ、芋パスタをつくり出したりしました。こうした市民の取り組みのノウハウが、中電の温水を利用した「クエ」を御前崎のグルメとして、同時に「遠州夢咲牛」、「つゆひかり」というお茶の売り出しにもつながっています。

実は、こうした市民によるまちづくりは、今から243年前にさかのぼります。御前崎沖で薩摩藩の御用船が難破したときに、御前崎の大澤権右衛門さんが助け、礼金として差し出された二十両を断り、その代わりに船底にあったサツマイモを分けてもらって、この地域へ栽培したことが始まりでした。芋の歴史は沖縄、鹿児島からこの地に着き、ここで最初に生み出されたのが「切干」ですが、これは、御前崎の栗林庄藏さんが考えついたものでした。

市民力で松林を復元、一人一木運動

海岸の松林や砂丘の取り組みもそうです。海岸防災林保護組合の皆さんは、自ら粗朶や竹籐を立てて砂丘を守ってくれていますし、池新田地区では東町保全林管理組合の皆さんが、松くい虫被害によって枯れた松で、炭を作るといった取り組みをしています。

地域の小中学生や町内会の皆さんは、海岸防災林に「一人一木運動」で松を植えています。子供には木に愛着を持ってもらうよう、植えた木へ一人一人の名札を付けています。

こうしてお年寄りと子供と一緒に木を植えることで、子供が成長する過程で健全育成にもつながっていくと思います。

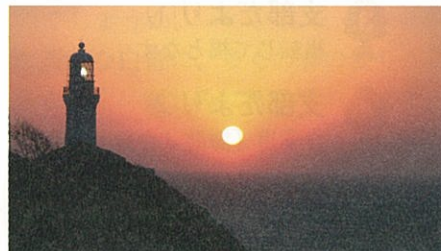


▲海岸防災林への市民植樹

土地への愛着精神を後世へ

このように、荒れた農地や砂地、そして過疎など、さまざまな課題に対して、御前崎市民は、一人一人が開拓者精神で土地を開墾したり、サツマイモを植えたりして、取り組んできました。これは大変な苦勞ですが、土地に愛着を持って「土地を大切にする」精神がずっと受け継がれていきます。先人たちのまちづくりに感謝しております。

これからも、少子高齢化が進む中で、重要課題である子育て支援や高齢化対策へも、市民一人一人がまず自立して、お互いに助け合いながら取り組んでいきたいと考えます。豊かな自然とマッチした住みよいまちづくりを進めてまいります。



▲水平線から昇る朝日と御前崎灯台



# 支部だより①

## 禍転じて福となす

森町 産業課

森町からは、近年、被害が著しいイノシシの被害状況と、皮肉にも被害の副産物として生まれた新しい特産品について紹介していただきました。

### 森町の概要

森町は、静岡県西部、遠州のほぼ中央に位置し、浜松市の東約25kmのところにあります。神社仏閣などの歴史的資源も町の至る所に点在し、豊かな自然に恵まれ美味しい食べものも数々あります。また町民の人情と気風、それらも森町の大きな魅力となっています。

町は、東西約13km、南北約24kmにわたり、面積は133.84km<sup>2</sup>で、人口は約21,000人です。北部山間地と南部の田園地帯は町の中央を流れる太田川で結ばれ、恵まれた自然条件もあって「森の茶」は高級茶として全国に名を馳せています。

近い将来、新東名（第二東名）の、森・掛川インターチェンジや森町パーキングエリアが設置されることから、新しい時代の発展が期待されています。

### イノシシ被害対策とB級グルメ

自然豊かな森町ではありますが、山あいを中心にここ数年イノシシの被害に頭を悩ませています。茶畑や周りの土地を数メートルにわたり崩したり、田んぼの畦道を耕してしまったり、またゴルフ場等においては、芝生を剥がしてしまったりと怪力(?)ぶりを顕わにしています。被害箇所を元どおりに復旧するには、多くの費用や労力を費やさねばなりません。

森町では、有害鳥獣として捕獲許可を得て猟友会に駆除を委託していますが、被害を及ぼすイノシシを一定量捕獲し、住民生活と共存できる環境に保っていくことは難しい状態です。

近隣市町のイノシシによる平成20年度の農作物被害状況を見ますと、掛川市が176.2ha・14,500千円、磐田

市が11.1ha・13,028千円、菊川市が1.2ha・2,425千円、森町が26.9ha・12,819千円と甚大な面積と被害額となっています。

森町における有害鳥獣駆除によるイノシシ捕獲実績は、平成20年度が過去最高で、年間77頭でした。捕獲方法は、主に銃器または箱ワナで行います。捕獲したイノシシは、埋葬にするほか食用にしています。増え続ける被害と駆除によるイノシシの処分を有効活用できないかと、薄場地区では「薄場元気プロジェクト」という地域振興団体が、イノシシ肉を加工したソーセージを、地元の肉屋さんと連携し開発しました。更に、B級グルメとしてホットドッグに使用し、これを「亥のちゃんドッグ」と名付けました。昨年は、袋井市のエコパで行われた全国B級グルメスタジアムにも出品し、ご当地グルメとして大好評を博しました。

森町では、農林産物が適正な農地・林地の管理のもと安定した収穫ができることで、農林業の発展を図り、生活圏を脅かすことのない安心した住民生活が送れるよう、平成21年度に「森町鳥獣被害防止計画」を作成し、今後、計画的に有害鳥獣の被害防止対策事業を推進していきます。

住民の発想の転換で登場した「亥のちゃんドッグ」ですが、新たな町の特産品として全国に発信できることを誇りに思っています。

禍転じて福となす。



▲イノシシによる被害



▲亥のちゃんドッグの販売



# 支部だより②

## 作業道「諏訪ノ台線」の開設

東部農林事務所 林道課

東部農林事務所林道課では、平成21年度に緊急経済対策路網整備モデル事業（以下モデル事業）により、旧三島県営林（以下旧県営林）で作業道の開設を行っています。その取組みについて紹介していただきました。

### 計画・測量

旧県営林では、林道諏訪ノ台線の開設が平成20年度を持って終了しましたが、旧県営林境まで到達できませんでした。他方、国道1号接待茶屋バス停付近からは旧県営林境まで作業路が付けられていました。今回、林道と作業路を結ぶ路線をモデル事業により開設することにしました。

この線形は、林道諏訪ノ台線に準じる旧県営林を貫く基幹的な路線であることから、トラックが通ることを想定した幅員3mの3級林道に準じた作業道としました。測量・設計については工期、事業費の関係により職員直営で行うことにしました。



▲作業道「諏訪ノ台線」起点付近

測量の前段階として、最初に5,000分の1の森林計画図に図上で盤押しをしています。等高線の間隔が広いので、どこにでも道が入りそうです。次に、図面に基づき現地で盤押しをしていくのですが、旧県営林が存在する箱根外輪山西麓の斜面は、山の勾配こそ緩いのですが細かいヒダが多く沢は深く抉れていて、図上

の検討ではどこにでも道がつきそうだったのに現地ではそう簡単にいきません。それでも盤押しで歩くことで線形のイメージを固めていきます。

選点では課長自ら先頭を歩き、IPを振っていきます。平面測量ではIPが谷に入ることが多く、釣竿がポールの代わりに大活躍しました。縦断測量では、測量中、霧が出てきてスタッフの目盛りが読めず往生したこともありました。4月末から6月中旬にかけて延べ10日ほど山に入り、大小7つの尾根を越え8つの沢を渡り延長1,123mを測量しました。

### 埋蔵文化財調査・設計

測量と並行して行ったのが、埋蔵文化財調査でした。この付近は埋蔵文化財が存在する可能性が高く、林道諏訪ノ台線では平成17年度に埋蔵文化財調査の結果、石器が発掘され、路線形を変更したことがありました。



▲位置図

今回も教育委員会と打ち合わせをして、試掘調査を行いました。幸い？何も出土せず、工事をして大丈夫と教育委員会のお墨付きを得ました。

設計に当たって留意した点は、土質が関東ローム層ということでした。滑りやすいので、縦断勾配は極力抑えたものにしました。また、ロームは盛土に適さないため切土のみで盤を確保したかったのですが、残土が膨大となってしまうため、止むを得ず盛土部を作りました。最も頭を悩ましたのが水の処理でした。大小8つの沢を渡らなければなりません。

現場に応じて暗渠、ヒューム管、洗越を使い分けました。大盛土では排水シートを入れて路体からの排水を図りました。路面水の処理は敷砂利の下に不織布を敷設し、縦断勾配の凹部に集まった水を暗渠管で排水しました。また、不織布を入れることにより敷砂利の食い込みを最小限にすると同時に工事車両の走行による路盤の練返し防止を図っています。

### おわりに

現在現場では、工期内完成を目指して工事を進めています。自分たちが測量した路線が現場で着々と出てくるのは、感慨深いものであります。

林道課では旧県営林を、林内路網を活用した利用間伐を効率的に進めるためのモデル地区と位置付け、平成22年度は森林整備加速化・林業再生事業により作業道を開設していきます。



# 県庁だより①

## 森林整備事業関連この1年

県建設部 森林局 森林整備室

### 3. 森林・林業再生プランに示された新たな森林・林業政策の方向

平成21年12月には、農林水産省から今後10年間の指針として「森林・林業再生プラン」が公表されました。目指すべき姿として、10年後の木材自給率50%以上（現状の木材生産1,800万 $m^3$ →4,000~5,000万 $m^3$ 。2020年までに達成。）を明記していることが大きな特徴です。

現在、国では、農林水産大臣を本部長とする「森林・林業再生プラン推進本部」を設置し、「路網・作業システム」「人材育成」「森林組合改革・林業事業体育成」「森林・林業基本政策」「国産材の加工・流通」の5つの検討委員会を設置、施策化に向けての具体的な検討を行っています。

今後、検討を踏まえた施策が、国から打ち出されてくると思われます。

以上、今年は、いろいろ変化がありました。市町や事業体など関係の方々には、情報がうまく流れず、御迷惑をかけたことも多々あったと思います。この変革の時期はもう少し続くと思われませんが、より迅速、かつ正確な情報提供、情報の共有化に努めつつ、今後も対応していきたいと思っておりますので、御協力のほどよろしくお願いいたします。

森林整備事業での21年度を振り返って、概略を紹介していただきました。

### 1. 「森林整備加速化・林業再生事業」

国の平成21年度第1次補正予算で、景気対策として「森林整備加速化・林業再生事業」に1,238億円が計上され、静岡県でも、速やかに事業実施できるよう準備を進めました。申請まで期間が短く、必須条件となっていた間伐について十分な要望を集めることができない中でしたが、平成21年度から3年間で執行する16億円の基金がなんとか確保できました。

その後、8月の政権交替により、この事業の執行が一時停止となりました。

しかし、基金事業の効果的な実施を条件に、予算は減ることなく執行停止も解除されました。そして、11月にはその条件として、平成22年度以降本事業で間伐や路網整備を行う事業主体に、「集約化施策」について今後の目標を示した実施計画の策定が義務付けられました。

同時期に「3年後の平成24年度には集約化施策の割合を10割に引き上げ、森林整備事業の補助対象を集約化施策に限定していく」旨の通知も林野庁から出されました。

### 2. 国や県の「事業仕分け」

平成21年11月に行われた国の「事業仕分け」で、森林整備予算の一部が「不要」の評価を受けました。その後の調整で、浜松市や川根本町の高齢級の人工林の間伐等を補助対象とする「里山エリア再生交付金」や、県や市町の管理する公的な森林の整

備に充てていた「森林・林業・木材産業づくり交付金の間伐メニュー」が廃止になりましたが、平成22年度に「農山漁村地域整備交付金」制度が新設となり、代替措置が取られることとなりました。

また、国の事業仕分けに先立ち、10月に静岡県でも独自に事業仕分けが行われ、公共造林事業（植栽）や県単林道事業などに対する県の付増し助成が対象になりました。マスコミや市民・県民の代表の皆さんに、県側の説明時間5~6分を含めて1事業30分以内という短い持ち時間で、「事業説明⇒質疑応答⇒判断」を行うものであり、資料作成や話し方の上手下手が非常に問われる場でした。

仕分け結果は「現状維持」の評価で、その後の県庁内の調整結果も、「現状維持」に落ち着き、特段の影響はありませんでした。



▲仕分け作業当日の様子



▲結果は即、公表



# 県庁だより②

## 『間伐に寄与する紙』を使って森を守り育て活かす ～ふじのくに森の町内会～

県民部 環境局 環境ふれあい室

昨年10月、林内に切り捨てられる木材を紙資源に活かしていこうと発足した「しずおか未来の森サポーター」制度の新たなメニューである『ふじのくに森の町内会』の概要を紹介していただきました。

企業の森づくりを支援する「しずおか未来の森サポーター」制度が平成18年度から始まり、これまでに15社の企業と協定を締結し、静岡県の森づくりをサポートしていただいています。

これまで多かった草刈や植栽のような直接的な森づくり活動に、「森林資源の活用」という視点を加えた「ふじのくに森の町内会」を「しずおか未来の森サポーター」制度のメニューとして、平成21年10月からスタートしました。

この「ふじのくに森の町内会」は、「間伐に寄与する紙」を使用することで、住民みんなで助け合う町内会のように社会全体で豊かな森づくりを支える仕組みです。

### 林内に放置される間伐材

近年では、林業の不振や担い手の不足などから、まだまだ間伐を必要とする森林がたくさんあります。さらに、木材価格の低迷などから、間伐されたとしても半分以上の木材が資源として活用されずに林内に放置されているのが現状です。



▲林内に切り捨てられた間伐材

この切り捨て間伐は、木材資源を無駄にするだけでなく、5～10年後に再

び間伐する際の障害にもなります。また、温室効果ガス発生による温暖化も懸念されています。

程度の良い間伐材ならば用材や合板の原料とすることもできますが、林地に切り捨てられるような丸太は、製紙用チップ等への利用や木質バイオマスとしての利活用が期待されます。

### 未利用木材を紙資源に活かす

そこで、県では林内に切り捨てられる木材を紙資源に活かすため、通常用の紙代に紙1kg当たり15円（未利用木材活用促進費）を上乗せした「間伐に寄与する紙」を、「ふじのくに森の町内会」のメニューとして整えました。

この「間伐に寄与する紙」を購入していただいた企業は、『ふじのくに森の町内会』のロゴマークを印刷物に掲載し自社の環境貢献をPRできるほか、「しずおか未来の森サポーター企業」として認定されます。



▲「間伐に寄与する紙」の印刷物とロゴマーク

企業等に御負担いただく、この未利用木材活用促進費15円/kgは紙の購入量に相当する重量の間伐材（絶乾重量）を紙原料として製紙工場に持ち込むこ

とで山元に還元されます。つまり原木1 m<sup>3</sup>に換算すると絶乾重量は400kgに相当するので6千円/m<sup>3</sup>が促進費となります。最初に紙を買っていただき、後でまとめて紙の購入量に相当する重量の間伐材を製紙工場に持ち込むクレジット式（紙の重量と間伐材の乾燥重量は1対1）としています。

また、製紙工場の巨大な生産ラインを通ると原料としての間伐材は他のパルプ材と混合されてしまうので、「間伐紙」ではなく「間伐に寄与する紙」と呼んでいます。



▲未利用木材（チップ）の搬入

### 森と企業等をつなぐ紙

まだ始まったばかりの取り組みですが、既に企業など4社に御活用いただき約20m<sup>3</sup>の間伐材の搬出が可能となりました。昨年の12月11日には約8.8m<sup>3</sup>の未利用木材が山から搬出され確実に資源の地産地消が行われています。



▲企業への説明会の様子

この「ふじのくに森の町内会」は、ふるさと雇用再生特別交付金を活用して（社）静岡県緑化推進協会に事務員1人を雇用していただき事務局として、運営管理や企業訪問などを行っております。

『ふじのくに森の町内会』のロゴマークを付けた印刷物は、森づくりをサポートいただいた証であることは勿論のこと、多くの企業等に森林の現状や大切さを知ってもらう橋渡しになるのも、この「紙」の役割なのかもしれません。



## タマチョレイタケの 簡易な菌床栽培技術

研究スタッフ(木材林産) 大石 英史

新しい栽培きのこととして森林・林業研究センターで栽培技術を開発しているタマチョレイタケについて、その取り組みを報告していただきました。

### はじめに

シイタケやヒラタケなどの栽培きのこのは、輸入量の増加や大企業の進出により、供給量が増大して価格の低迷が続いています。このため、中小規模のきのこ生産者の経営は厳しく、市場に流通していない新しいきのこの栽培技術開発に大きな期待が寄せられています。そこで、当センターではその期待を担うものとしてこれまでタマチョレイタケの菌床栽培の研究に取り組んできました。

### タマチョレイタケとは

タマチョレイタケは、多孔菌科タマチョレイタケ属のきのこで、マイタケに近い仲間です。天然では傘は浅いじょうご状で、その直径は4～12cm位、傘の表面は黄茶色で平らな鱗片を帯び、下面は白色を呈し、管状の孔が一面にあります。天然にはあまり発生しない全国的にも珍しいきのこで、静岡県内では富士山麓で子実体が見つかっています。



▲写真1 野外における袋栽培で発生したタマチョレイタケ

### 栽培技術

きのこの生産方法は生産者ごとに様々なため、当センターではより多くの生産者の方がタマチョレイタケの栽培に取り組めるよう、袋での栽培方法や野外簡易施設での栽培方法の開発を行ってきました(写真1)。その成果の一部を紹介します。

タマチョレイタケの袋栽培に用いる培地は、ブナおが粉、一般ふすま及び米ぬかを絶乾重量比8:1:1で混合したものに水を加え含水率65%に調製したものをきのこ栽培用袋に1kg充填後、滅菌して作成しました。

その後、種菌を接種した菌床を温度22℃、湿度70%の室内で約90日間培養しました。それらを、空調施設にて発生させたところ、1菌床当たり110～170gの発生がありました。同様に培養した菌床をヒノキ林内及び人工ほだ場の簡易施設(棚施設)にて発生させた結果、3月末に菌床を設置すれば4月末から6月初旬まで

子実体が発生しました。又、9月末に設置すれば10半月ばから11月初旬まで発生して、空調施設と同等以上の発生量が得られました(図1)。これらの結果から、タマチョレイタケの培養は室内で行い、時期を選べば野外でも発生は可能であることが分かりました。今後タマチョレイタケを新しい食用きのこ・新規の栽培きのことするため、施設栽培生産者等の生産現場へ成果を普及したいと思います。

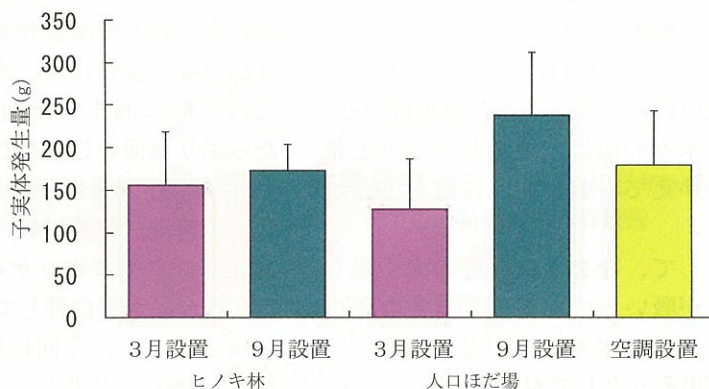
### 食材としての特徴と普及

タマチョレイタケは食材として、味や香りにくせが無く、肉質は淡い白色で菌ごたえが良いという特徴があります。食材の特徴を活かした料理としては天ぷら、油炒め、ピラフ、フライ等がよく合います(写真2)。



▲写真2 タマチョレイタケの野菜炒め

今年度、戦略課題研究「富士山」で日本大学国際関係学部金谷研究室と共同でタマチョレイタケを活用した商品開発に取り組んでいます。今後、タマチョレイタケを新しい静岡特産の食用きのことしてPRしていきたいと考えています。



▲図1 野外における子実体発生量



# 本部情報

## しずおか森の仕事体験会

### 来たれ!! 新たな林業の担い手

林業を再生し、森林の整備を加速化させるためには、新たな担い手の育成が喫緊の課題です。一方、景気の後退により、新たな職を探している人も多数おり、雇用対策も急がれます。

協会では、県林業振興室の緊急雇用対策に同調して、林業作業を通じて就業に役立てる体験会を、2月に2回、島田市川根地域で開催しました。

体験会には、20代の若者から熟年の

方まで24名が、林業の現状の受講、間伐等の作業現場や原木市場の見学、チェーンソーや刈払機による作業体験を、寒風にも負けず、5日間、熱心に取り組んでおりました。

参加者は、林業の仕事の素晴らしさと大変さの両方を実感したようですが、この体験で林業への関心が更に高まり、就業に繋がることを期待します。

当協会は、今後も、就業相談会や林業就業支援講習の実施を通じて、林業に意欲を持って就業しようとする人の支援と確保に努めてまいります。

体験会の実施にご協力頂いた(株)東海フォレスト様、片平林業技術者協会会長様、県森連様、有難う御座いました。



▲仕事体験会

## 山村及び林業の振興研修会

### 木質バイオマス、菌床しいたけ

県内には、山村の活性化や林業の持続的な発展を目指して、各種の施設導入に果敢に挑んで、所期の成果を収めている優良事例が多数あり、これらに蓄積された知恵や経験等は、貴重な知的資源です。

今回は、地球環境問題と未利用木材資源の活用に対処した「木質バイオマス」と、山村の貴重な収入源の「菌床しいたけ」を学ぶ研修会を、市町職員等29名の参加を得て、2月9日に開催しました。



▼移動式チッパー



東海パルプ(株)の「木質バイオマスボイラー」及び(株)東海フォレストの「移動式チッパー」では、環境負荷低減への取組み、チップ調達の状況、チッパーの実働等を、また、農事組合法人川根美味しいたけの「菌床しいたけ生産施設」では、諸資器材の購入、温度調節管理や販路梱包など、施設側の丁寧な説明を受けることが出来ました。

今後、この研修会から得た知的資源を県内各地へ水平展開させて、有効な各種の施策や取組に繋がることを期待しております。

ご協力頂いた施設の皆様、有難う御座いました。

## 事務局だより

★春は弥生、躍動感の溢れる新たな生命が一齐に胎動する季節となりました。

陽の少ない冬日の間、「花の咲かない寒い日は、下へ下へと根を降ろせ」と、木々の根は大地をしっかりと抱きかかえて、強い北風に耐えてきました。

そして、今まさに、その太く逞しい根が吸い上げた養分と温かな陽の光を得て、木々の梢が天に向かって伸び出そうとしております。

林業や山林も然り。低コスト林業

や担い手の育成など、日々の地道な積み重ねが、逞しい足腰をつくり、必ずや大きな花を咲かせます。

私たちも、木々に負けないよう、明日を目指して頑張りましょう。

★御前崎市長様には、本県の最南端、三方を海に囲まれた同市の魅力を、たっぷりお伺いしました。

とりわけ、遠州夢咲牛、まぼろしのクエ料理、芋焼酎の「海と風」、御前崎パスタやコロッケなどなど、新たな特産品が目白押しでした。

残念ながら、今回は機会を得ませんでした。が、「是非とも、この次は!」と、垂涎の楽しみは、もう少し先ま

でとっておきます。

★平成21年度版「静岡県森林共生白書」の主題は、「社会全体が支える豊かな森林づくり」でした。

年度末の春を迎え、会員の皆様を始め、企業、NPO、自治会等の県内各地の取組が、この一年間でどんな蕾を膨らませ、咲かそうとしているのでしょうか。

新たな白書に、多くの春の便りが載ることを、楽しみにしております。

(小松)